

ある若き求道者との対話（その1）

最近、ニューヨークで開いています聞法会に出席なさったある若いお方とメールによる対話が続いています。私自身、大変教えられることが多いので当通信に編集し直して記します。

Aさん：仏門に出家すると言う事は、俗世間から離れて生活するということですよ。私は仏教徒ではないんですが、最近、世俗から離れるというところでそう思うんです。というのも、よく仏教で欲を削ぎ落とすとか、執着心をなくす、というのを聞きますけど、もし本当の意味で実践しようと思ったら、出家しない限り無理じゃないのかなと思って。普通に、この資本主義社会の中で生活してる分には無理じゃないかということです。世界中どこへ行っても、物質主義は追いかけて来て、逃げ場がないんじゃないかと思ったんですけど、どうなのでしょう？この資本主義社会から逃れて生きるには、それこそ、出家して托鉢して生きるとかしかないんじゃないのかなと思ったんです。

私：私自身はお寺の出身ではなく、まさに資本主義のかたまりのような銀行で大学卒業後 12 年間働いていました。ですから、わたしも A さんと同じような悩み、疑問を持ちながら実業界で生活していましたが、それと同時に、そういった悩み・疑問を持っていたゆえに銀行で働いている時代からずっと、とても純粋な本物のお坊さんのところへ良く通っていました。そんなことで、銀行時代から仏教書をよく読んでまいりました。

その後、銀行をようやく決心して辞めてからも葛藤が続き、色んな職業をどさ回りのように経験いたしましたが、段々と心のなかで、私自身、尊敬する師のお坊さんのような本物のお坊さんに成りたいという気持ちが強くなってまいりました。そしてとうとう、43 才の時に機が熟し、坊さんになることを決断いたしました。これを出家とも、得度とも申します。一概に出家といいましても、色々ございます。世俗を離れて、例えば山岳にこもったり、また禅寺にこもって修行するという大変厳しい道があります。この道はとても尊い道であります、限られた本当に少数の条件の整った方しか全うできない道です。

そして、たとえそういう方が托鉢によってだけ生活できましたとしても、そ

の托鉢で頂戴した食べ物やお金は、一般の世俗の方のお布施であります。そのお布施は、現代資本主義社会の中で稼いだお金であります。ですから、そういう出家者にいたしましても、この現代に生きる限り資本主義社会と無縁ではられないのです。

私は浄土真宗の僧侶です。浄土真宗といいますのは、ご存知かもしれませんが親鸞という鎌倉時代のお坊さんが開かれた教えです。親鸞さんも29歳までの20年間は比叡山というとても厳しい天台仏教の修行道場で、自分の煩惱を何とか清めようと、仏になろうと懸命に修行に励まれました。しかし、親鸞さんは大変まじめな正直な方で、いくらそういう厳しい山の中のお寺で修行をいたしましても、煩惱というものは決して無くすことができないという、自分の身の事実に目覚められまして、比叡山を下りて京都の街中、つまり世俗のど真ん中で道を求められるようになり、幸いに法然上人という大変優れた本物の求道者に出会われて、何も出家しなくても、世俗のど真ん中で、普通の人間として生活をしていく中で、心が清められて本当に安心できる道を確認されて歩まれました。それが浄土真宗の教えです。

仏教の教えは、蓮の花にたとえられます。それはなぜかといいますと、蓮といますのはどろどろとした泥の中に於いてこそ美しい花を咲かすのです。人間も、世俗というどろどろとしたところからは決して逃れることはできないのですから、その泥のなかで生活しながら、自分の心一つに清く美しい仏心の花を咲かすことができるのです。これこそが、仏教の仏教たる由縁で、蓮の花にたとえられる理由はそこにあります。ですから、私は浄土真宗の僧侶でありますから、世俗のど真ん中で、皆さんとご一緒に本当に清らかな仏のおこころを頂きましょうと願って毎日生きています。

Aさん：世界の貧困や、自分の経済活動がもたらす環境汚染に対して無視して生きることについて、どう思いますか？

私：お釈迦様をはじめ真の仏教徒は、生きとし生けるもの一切の幸福を願って生きるのです。これは、仏教精神の根本です。つまり「自分さえよければ」という考えの、全く反対です。

仏道を歩むといいますのは、貧乏で苦しんでいる人の問題、人間活動によって環境をますます汚染している問題、病気で泣いている人の問題、親しい人や身内があつという間に事故や病気や天災で亡くなってしまつて悲歎にくれてい

る人の心の悩み、いつも会社や学校でいじめや人間関係で苦しんでいる人の心の悩み、まさかの出来事に遭遇して泣いている心の悩み等々、おおよそ人間が生きている以上、自分の身の上にまた他人の身の上に、また人間以外の動植物の身の上に起こりうる「苦」に対して、自分はどうすることができるであろうか、どう考えていったらよいのであろうかと、どこまでも「自分の問題として」真摯に尋ねていく道です。

そして、具体的に自分としてできることを考えて行動していく歩みにおいて、より一層「自分というものはどれほどの力があるのか」「自分がこの社会で今生きているというのはどういうことなのか」等々、全体との無量無数の様々な関係のなかで今生きていることを自覚するようになってきます。そのようなプロセスそのものが仏道の歩みであり、この世に生まれた以上なめていかねばならない一切の自他の人間苦に対して、各自がどう安心を得ていくのかを 2500 年前からとうとうと説かれ続けているのが仏教です。

Aさん：そうですね。よく考えれば、人間の勝ち負けなんて、おかしな物ですね。例えば、広島原爆も、落とされた方、たくさん殺した方が勝ちだなんて、おかしなゲームですね。そう思うと、人に負けることは恥ずかしくありませんね。人を踏みにじってまで何かを得ようとして、それが勝利だというルールゲームが人生だとしたら、正気の沙汰とは思えませんね。もうすぐイースターですが、せっかくキリストも、人類の罪をかぶって十字架にかけられたのに、人類のその後が心配で死に切れなかったんでしょね。

私：Aさんのおっしゃいますように、キリストさまも人類のその後を永遠にご心配なさっているでしょう。人間の煩悩は深く重く底なしで、自己中心性は免れないと、わが身を見つめていきますと気づかされます。他人や動物を思いやる心を人間は持っていますが、何よりも「この自分が一番かわいい」という根性が心の奥底にしっかり染み込んでいるのがこの私であり、すべての人間であると思います。つまり自分が最もかわいいんだから負けたくない。

しかし、ここに『負けてのく 人を弱しとおもうなよ 負くる力の あればなりけり』という好きな古歌があります。人間みな他人よりも劣ったり、負けていくのはいやなもんですが、そういう勝ち負けを超えた世界に出なくっちゃ真の安心は得られまい。そういう世界、これをお浄土と呼びますが、心がその世界に住んでいる人は、負けても真に安心し切って生きていける人です。この心の力を有する人間に是非ともならねばならんと思います。合掌

(ご感想・ご質問は、mikinakura87@gmail.com までどうぞ。)